103

# 北條時宗公鑽仰會講演集

特240
291

北條時宗公と伊藤公……伯爵　金子堅太郎閣下
法光寺殿の一喝……前管長　太田常正猊下
元寇と北條時宗公……子爵　石井菊次郎閣下

始

第240
291

本講演集の中金子伯爵の御講演は本年四月三日本會大會の席上千餘の會衆を前にして吐露せられた日露開戰直前の秘話で我が重大危局に臨で時宗公が大活現前して重臣の決意を促したと云ふ感銘深き御講演であつて公に關する新な史料として後世に傳へらるべきものであると思ふ。外に前年の大會に於ける太田前管長及石井子爵の御講演をも合せて輯錄する事にした。

この集をお讀み下さる諸賢が一層よく時宗公の大精神を會得せられて益〻盡忠報國の至誠を傾け更に自己修養の一助にも資せらるれば編者の欣び之に過ぐるものはない。

本集を上梓するに當つて石井光雄氏の資助を仰だ事を附記し深く謝意を表する次第である、尚金子伯爵の御演題は伯の御揮毫になるものである。

昭和十一年十一月

## 北條時宗公鑽仰會々則

名稱　本會ハ北條時宗公鑽仰會ト稱ス

目的　本會ハ北條時宗公ノ偉德ヲ鑽仰シ其行蹟ヲ敷衍シ其祭祀ヲ修スルヲ以テ目的トス

事業　右ノ目的ヲ達センガタメニ左ノ事業ヲ行フ

一、毎年四月四日ニ公ノ祭典ヲ修ス且ツ十年目毎ニ大祭ヲ修行ス

一、隨時講演會ヲ開催シ册子ヲ發行ス

一、前項ノ外必要ト認ムル事業ヲ行フ

會員　會員ヲ分チテ贊助員及正會員ノ二種トス

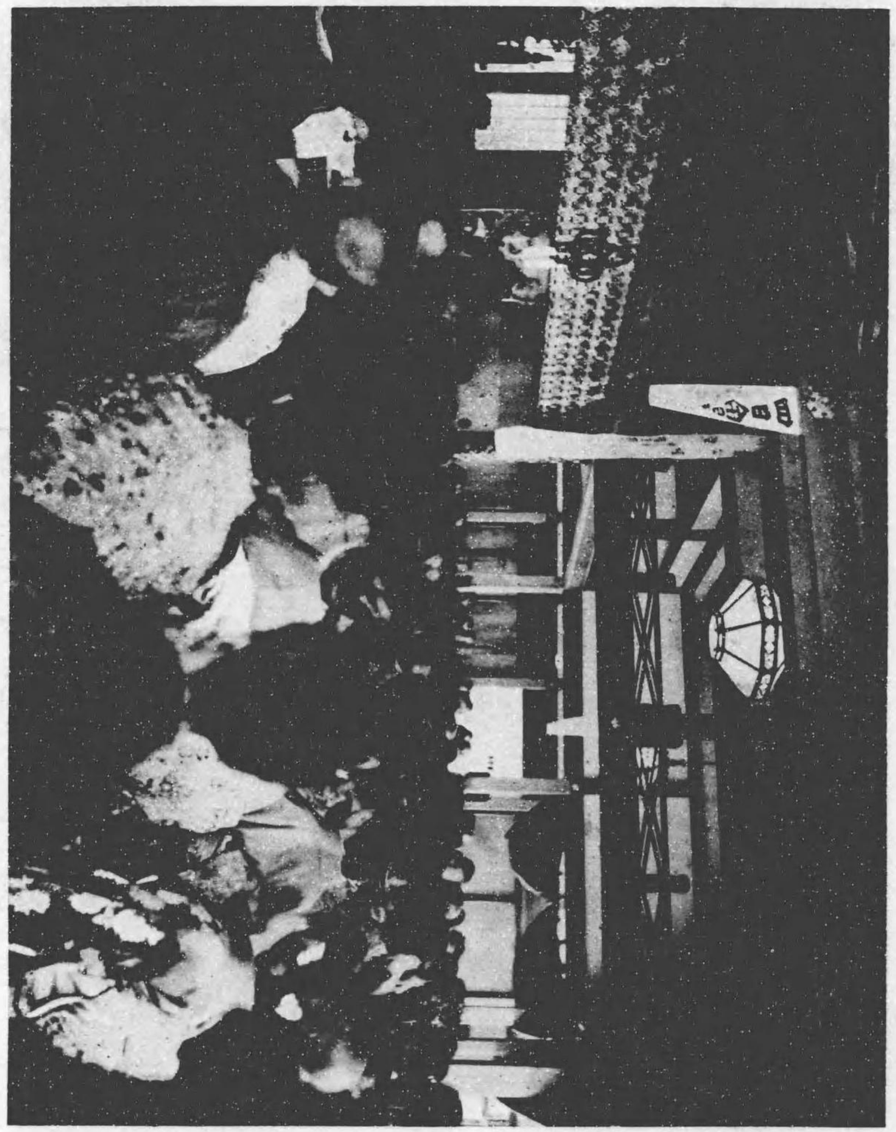
一、一時ニ金五拾圓以上ヲ寄附シタルモノヲ贊助員トシ毎年壹圓以上ヲ寄附スルモノヲ正會員トス

一、本會ニ對シ功勞アリト認ムル時ハ前項ニヨラズ理事會ノ推薦ニヨリ贊助員タルコトヲ得

經費　本會ノ經費ハ會費及ビ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

役員　會長一名、理事六名、評議員若干名

事務所　神奈川縣鎌倉郡大船町圓覺寺佛日庵內ニ置ク



演講の下閑郎太堅子金爵伯るけ於に會仰讃公宗時條北
（てに寺覺圓倉鎌）

# 北條時宗公と伊藤公

樞密顧問官伯爵　金子堅太郎

諸君、私は只今お斷りしたやうに、兩三日一寸風氣でありまして、甚だ御無禮ではございますが、外套を着たまゝでお許しを願ひたい。

私が今日御招きによつてお話致しますことは、時宗公の赫々なる勳功を述べるといふことは、當山に於ては、住職の皆さん方、信徒のお方も御承知のことで、又歴史にも赫々たることで、私が申すまでもない。唯、私が日露戰役の當初に於て、國難に當つてアメリカに官命を奉じて參りましたのは、全く時宗公の元寇の當時に御苦心のあつたことによつて、私も些か國家の爲に萬里の波濤を越えてアメリカへ行

つて、國民の義務を盡さうとして私が參りましたが、その事柄を、今日六百五十年の祥月命日に於て、本山に於てお話するといふことは、決して不當のことではないと思ひます。洵に適當と私は信じますから、これからお話しやうと思ひます。

御承知の通り日露戰役は、元寇に次ぐと云ふよりは、それ以上の國難であつた。元寇が二度我が國に侵擊したことは皆さん御承知の通りで、私の生國は筑前の福岡でありますが、子供の時から元寇といふものは、非常に子供及び大人の頭に印象を與へて居る。子供が泣く時には、ソラ元寇が來ると言はれるといふ位のことであります。

私の村などは元寇のためにさん〳〵荒された、御承知の通り元寇は日本海を渡つて朝鮮から水路に依つてやつて來て、二つに分れて壹岐、對馬を占領して、筑前の姪ヶ濱といふ所に上つて、福岡から箱崎の方まで人家を燒いたりして占領した。九州の諸大名は筑前に來つて防戰したけれども、力及ばず慘々な目に遭つた。さうして私の村向ふの殘の島を根據地として、船橋を渡つて——船を博多灣に並べて、その上に板を渡し——福岡に上陸した。我々は子供の時から元寇といふものが、餘程



の國難であつたといふことは充分知つて居た。筑前の八幡宮とか、天滿宮、その他の神社の繪馬堂には、元寇が來て筑前人を虐殺し、又子供を兩親の目の前で腹を斷ち割つて慘酷なことをしたことが、當時の繪馬として揭げてあるので、子供の時から神社に行つて繪馬の大和繪を見れば分り、元寇の襲來したことは、筑前にとつては非常な慘酷なことであつたといふことを知つて居つた。その後日本歷史などを讀むことによつて日本に元寇が襲來したといふことが、如何に大きな困難であつたかが分つた。

古來日本は隨分戰爭によつて上下國民が苦しみましたが、元寇の當時の如く、外國の軍勢が來て我國を荒し、我が國人民を虐殺したといふことは元寇より外にはない。日清、日露の戰爭があつても、未だかつて我が國內に這入つたことはない、皆朝鮮だとか滿洲であつて、我が國を占領し、我が國民を虐殺して、家を燒拂つたといふことは元寇の外にはない。斯ういふ歷史を子供の時から聞いて居つた。時宗公は國を救つた英雄であるといふことは子供の時から我々は承知して居つた。

ところが、時宗公のことについて、特に私が感じたのは、明治三十七年の二月四

日、御前に於て、明治天皇の御親臨の下に閣議が開いた。當時は桂太郎が總理大臣で、小村壽太郎が外務大臣、寺內正毅が陸軍大臣、山本權兵衛が海軍大臣、元老は伊藤、井上、山縣、松方、大山、西鄕といふ當時の元勳が揃つた。元勳と閣臣が寄つて御前會議を開いた。二月四日以前にも二度御前會議があつた。どうしてもロシアの我が國を壓迫することは、如何なる外交手段を以てこれに結末をつけやうとしても外交では駄目だ。我國が一歩を讓れば彼は一歩進む、朝鮮、滿洲をロシアの領分とせなければ不慊らざるロシアの決心と見たから、この上は戰爭の決心をするより外はない、といふことは、當時の政府より二度も御前會議に於て述べられた。

ところが當時の狀況では、ウラヂオストックと旅順の艦隊の數から言つても、軍艦の數から言つても、軍艦の性質から言つても、とても日本の軍艦では及ばない、向ふは鋼鐵艦で大砲も備はつて居るが、我國のは鋼鐵艦は鋼鐵艦でも、とても向ふの艦隊とは比較にならない。又陸の方でも、旅順や滿洲に居る兵數だけでも莫大なもので、況やロシアの本國には殆んど二百萬と言はれた大軍が居る。これを以て我が國に侵擊したら、我が國は如何なる手段を盡しても、とてもこれに勝つ見込みは



ない。そこで二日間の御前會議があつても、なか〳〵開戰といふまでには政府も極まらず、元老も極めることが出來ず、從つて明治天皇に上奏することも出來ない。二日間の御前會議は終つたけれども開戰といふまでには行かない。

最後は卽ち三十七年の二月四日の午後三時から御前會議が開かれて、今度はもう最終の日で、何とか極めなければならぬといふ、ギリ〳〵の決着の日になつた。三時の御前會議が開かれるといふ前に、明治天皇は伊藤公を午前十時に召された。さうして御前に於て明治天皇と伊藤公と御熱話があつて、詳細に日露の狀況を伊藤公から上奏されて、そこで陛下と伊藤公の間にお話が濟んだ。それは如何なることを伊藤公が上奏されたか我々は知らぬ、又當時の閣臣も知らぬ。

明治天皇と伊藤公との間にお話合が濟んで、次いで午後三時に元老內閣大臣が御前に於て閣議を開いて、外交談判をしてもロシアはどうしても不慊らないで、滿洲は勿論朝鮮までも侵さうといふ決心が分つた。朝鮮、滿洲を取られゝば、次いで來ることは對島、壹岐、九州、北海道が如何に脅かされるか分らない。そこで御前會議が三時から始まつて午後まで續いて、さうして愈〻五時になつて、陛下が、この

上は如何程内閣の議を盡しても、國を賭して戰ふより外ない、この國を賭して解決するより外ないと御決裁遊ばされて、遂に日露開戰といふことに極まつた。

さうして、伊藤公は御前を下つて、午後六時少し前でしたが、私に電話を掛けて、急に會ひたいから靈南坂の官邸に來てくれと言はれたので、私は食事を濟まして、直ぐ靈南坂の伊藤公の官邸に行つた。その時の伊藤公の顏色は今尙ほ私の目に殘つて居る。私は伊藤公の秘書官として七八年も座右に居り、その後も內閣に一緒に居つて、伊藤公の國事に憂ひられたことは度々目擊したが、その時も私が官邸に這入つて行つて、伊藤公の二階の書齋に通されて、戸を開けて這入ると、前に大きなテーブルがあつて、そこの安樂椅子に伊藤公が腰を掛けて居られる。私から五、六尺離れた所に坐つて居られた。

私が這入つて行つた時の有樣は、伊藤公は腕組みをして、下唇を食込んで、下を向いてじつとして考へ込んで居られた。これは伊藤公が國難に當り、國事の重要な時に、自分に途方にくれた時の態度で、私は屢々之を見た。たゞ下唇を食ひ込んで考へ込んで居る、私はその前に立つて「只今電話で急に御用があるといふことで參



りましたが、何の御用ですか」と言つても頭も上げられない。勿論言葉も發せられない。たゞじつと腕組して默つて居られる。私も如何程聞いても無言ですから、暫く無言のまゝ立つて居つた。暫く立つて「一體どういふ御用でお呼びになつたですか」と聞いても何とも言はれない。さうすると稍〻經つてから、腕組をして居られる手を下して、私の顏を見て「君は食事をしたか」「實は私は食事を濟まして來ました」「僕はまだ食事をして居らぬ、今から食事をするから、食事の後にゆつくり話たい、まあそこへ掛け給へ」、そこで私はそこにあつた椅子にかけました。

さうすると伊藤公は呼鈴を押して女中を呼び、食事を持つて來いと命ぜられると膳が來た。そこには例の通り、吸物、それから刺身、煮肴、野菜の煮たのに、漬物がある、それを女中がそこへ据へて、傍に立つて居りますと、吸物の蓋も明けず、刺身、煮肴に手も觸れず、野菜にも手を附けない、たゞ茶碗の蓋を取られると、白粥が一パイ入つて居る。それに食鹽を入れて箸でかき混ぜて、白粥だけを少し食べられ、もうよいから下れ、と言つて女中に下げらして、さうして傍にあつたポート・ワインの入つた壜をとつて、コップに殆んど八分目ばかり注いで、グツと呑んで、

「さて、外の用ではない、君を呼んだのは、只今から直ぐアメリカに行つて貰ひたい」斯う出抜けに言はれた。「アメリカに何の用ですか？」「實は今日午後三時から午後五時過ぎまで御前會議をした、だん〳〵協議したが、もう日露の交渉は戰爭するより外なく、この以上は國を賭してロシアと戰ふより外に、日露の問題は解決せぬ、依つて只今日露開戰といふ御裁可があつた。それで小村外務大臣に申附けて、直ちに暗號電報でロシアのセントピータスブルグ——ロシヤの帝都に駐在して居る日本公使栗野慎一郎の所に、國交斷絶の通牒を出して、速にロシアを引上げよ、といふ電報を打たせて置いたから、今晩は向ふに着く、さうすると明日早朝には、日露開戰といふことはロシア全土に分ると共に、アメリカにも分り全世界にも分る。それで君はアメリカに行くことに、今日の御前會議で極つたから、アメリカへ行つて貰ひたい」斯う言はれた。私は「一體何の用でアメカへ行くのですか？」斯う聞いた。「君も知つて居る通りに、日露の開戰になると、ロシヤと日本の人口の點から見ても、陸海軍の兵備の點から言つても、財政の點から見ても日本はとてもかなはない。唯、擧國一致の決心をもつて戰ふより外ない。而してイギリスは我が同盟國



であるから、應援しやうと思つても、まだロシアと日本とが二ケ國で戰つて居る間は出來ない。向ふがドイツと聯合して來れば、イギリスも日英同盟によつて日本を助けるが、ロシアと日本と單獨の戰爭では加勢することは出來ない。ドイツはどうかといふと、今度も露佛同盟はして居るが加勢することが出來ない。ドイツはロシアに同情を寄せて居る。の日露戰爭をケシかけたのはドイツ皇帝である。これはロシアとして世界廣しと雖も日本に同情を寄せてくれるやうに、これから盡力するのは唯アメリカ合衆國のみである。それで君はアメリカへ行つて貰ひたい。さうして、幾ら考へても日本が勝つといふことは、陸海軍共に見込が立たない」。あれだけの大軍をして勝ちましたが、當時は伊藤公のみならず、山縣、大山、西郷でも、軍人方の寺内、山本と雖も勝つ見込は立たなかつた。「たゞ向ふに鴨綠江を渡らせないやうに、鴨綠江の南岸でロシア軍を防ぎ止めるといふのが最上の策であつた。鴨綠江の南岸に日本の軍備を皆集中して、ロシア軍の南下するのをあすこで防ぎとめて居れば、丁度回向院の相撲が四つに組んだやうなもので、ロシアと日本が鴨綠江を境に、進みもしなければ退きもせぬ、あすこで組みやつて——これは一年立つか二年立つか分

らない、その時日露兩國が一年か一年半もあすこで、互に四つになつて、大相撲になつたやうに兩國がして居れば、これだけが日本の頼みである。この時に水を入れて行司の役をするのは、さきに僕が言つた通り、イギリスは喙を出さぬし、フランスも出さぬ、ドイツも勿論出さぬ、唯調停の任をする國柄はアメリカ合衆國より外ない。合衆國は獨立した國であつて、西には太平洋があり、東には大西洋があり、歐羅巴とは離れて居るから一番手が出し易い、どうしてもアメリカ大統領ルーズヴェルトに行司役として、さう二ケ年も勝敗がつかぬやうでは、何時までもやることは、兩國の間のみならず、世界の平和を害するから、こゝで平和克復にするやうにといふ水を入れて、調停の役をやつて貰ふより外ない。君はルーズヴェルトとはハーバート大學の同窓の關係があり、又ルーズベルトとは長い間親密の間柄であるから、即刻アメリカへ行つて大統領に會つて、日露戰爭の沿革から今日の狀況を詳しく話して、さうして時機が來たら大統領に調停の役をして貰ひたいといふことを、君から一つ談判するより外、この結末はつかない。さうしてアメリカ人の同情を寄せるやうにやつて貰ひたい。君に是非その任を頼みたいといふ元老、內閣の一致の



決議であるから、是非行つて貰ひたい」。

それから、私は「よく分りました。お話の通りにアメリカが一番調停の役にはよい位置に居る。又大統領ルーズヴェルトも私の親友である。しかしこれは私には到底成功の見込はない。どういふ譯かよく考へて御覽なさい。アメリカとロシアとの關係はどうであるかといふと、千八百十二年のイギリスとアメリカが戰つた時は、歐羅巴は皆アメリカを見捨てゝしまつて應援しない。その時歐羅巴の強國の中で唯一つアメリカを助けたのはロシアである。又千八百六十一年のアメリカの南北戰爭の時には、アメリカが南と北に別れ、奴隷廢止の軍をした。五年間續いて——千八百六十一年から六十五年まで——アメリカが二つに別れて戰爭をした。その時はイギリスは南の賊軍を助けて、アメリカを助けたのはロシア一國である。イギリスの艦隊がニューヨーク灣に這入つて、ニューヨークを脅やかさうといふ準備をするや否や、いきなり先手を打つてニューヨークの港口に艦隊を並べて、イギリスの艦隊が這入れぬやうにした。さうしてロシアがアメリカを助けた。それでいまだに南北戰爭に戰つた軍人が生きて居るから、それを目擊して居つて、ロシアは殆んどアメ

リカの救世主である、アメリカを救つた恩人と感じて居る。

斯の如き外交の關係があるのに、日本はどういふアメリカとの關係があるか。商賣はやつて居るけれども、アメリカに對して、ロシアが二度の軍に加勢したやうには、一つも日本は加勢したことはない。アメリカに恩を賣つたことはない。米國の外交上には日本とロシアとは比較にならない。必ずやアメリカはロシアを贊成することは分つて居る。

のみならず、旅順、ウラジオの食物とか毛布、その他の軍需品はアメリカが皆んなロシアと約束して賣つて居る。食物も賣れば、罐詰も賣るし、肉も賣る、貿易上にも深い關係を持つ、アメリカの商人がサイベリヤの鐵道を助けて居る、又鐵道のレールはアメリカの鋼鐵會社が賣つて居る。商賣上にも大得意である。日本はこちらから生絲と茶をアメリカへ賣つて　辛じて日本の經濟を立てゝ居る。

それだけでも比較にならないのみならず、アメリカの富豪は皆ロシアの貴族と婚姻をして居る。南北戰爭の有名なグランド將軍なども、ロシアの貴族と深い姻戚關係になつて居る。ニューヨークの金持の娘はロシアの貴族に嫁に行つて居る。外交



上、商賣上、家族的の三つに於て、ロシアとアメリカの間には深い關係があるが、日本は何があるか、外交上でも恩は受けては居るが、恩を賣つたことはない。商賣上でもこちらで金を儲けて賣込んで居るが、アメリカは日本から儲けて居らない。ロシアとの間のやうな家族的婚姻關係はない。

この中へ私が飛び込んで行つたつて、どうしてアメリカ人民の同情を寄せることが出來ますか。又ルーズヴェルトに會つて話をしても、親友は親友だが、大統領として一國の主權者である以上は、私の言ふことは聞きますまい。だから成功する見込はない。私はお斷りする。」斯う伊藤公に言うた。

「それは歴史はその通りだ。又實況もその通り、君の言ふ通りだ。然し君が行かなければ外に行く者がない」と言はれた。私は外に幾らも行く人はある、と言つて一々名前を擧げて、「小村壽太郎もアメリカには私と一緒に留學して居つたし、目賀田種太郎も今日本の有數の官吏である。これ等をおやりなさつたらよいだらう」。

「それは出來ない、あれ等はルーズヴェルトを知らない。ルーズヴェルトを知つて居るのは君より外にない。君とルーズヴェルトは親友であるから君行け」「それは

私は親友であるけれども、到底この國難に當つてルーズヴェルトを說得する見込はない」「君が行かなければアメリカを取逃す、そふなると何處の國が調停するか」「私は此任務に當る人は日本にたつた一人あると思ふ。私如き者は適任ぢやない。唯一人日本に行くべき人がある。それは貴方です。貴方がお出でなされば、先程仰しやつた通りに大統領が承知するでせう。貴方より外に元老多しと雖もありはしない。貴方がお出なさるがよい」。すると伊藤公は、「僕が行ければ行くが、俺は行けない。その證據は、今朝十時に參內した時に、到底戰爭の外は解決の途はないと申上げたところ、然らば開戰に極まつたならば、伊藤は我が座右を離れてはならぬ、東京に居つて、戰爭中の外交は伊藤に相談するから、こゝを離れてはならぬ。宜しうございます。私はお側を離れませぬ、とお約束を今朝したから、僕は行きたくても行けない。であるから君行つてくれ」、「私には成功の見込がない。それは私が行つたならば、仰しやる通りにアメリカの同情を寄せることもして見ませう。又ルーズヴェルトに事情を話して賴んでも見ませうが、向ふの方が同情を寄せてくればよいが、こちらから同情を寄せるのではないから、如何程話しても役に立たなければ



仕方がない、ルーズヴェルトに如何程賴んでも、友として話は聞くが、大統領として僕は調停は出來ぬ。と言はれゝば、私は何の面目があつてアメリカへ行きませう。成功の見込みがあれば行きますが、私は成功の見込みがないから行けない。私はアメリカには長い間居つたから、友達も大勢居るし事情も知つて居るけれども、知つて居れば居る程行けない。知らなければ盲滅法に押しで、宜しうございます、で行きませうが、アメリカに長く留學して居つて、その後もアメリカに度々行つて、よく知つて居るのが私の不幸で、この國難に當つて、アメリカに行くことは到底見込がない。政府の御依賴の御懇談に應じても、成功の見込がないのだから、私はお斷りする」。

それから伊藤公の言はれるには、「一體この軍について成功の見込があると誰が思つて居るか。陸海軍でも元老でも閣臣でも我々でも、成功の見込はない、運を天に任して戰ふの外はない。我が爵位も財產も陛下の賜である。君の爵位も財產も陛下の賜である。今日は成功不成功など言ふべき問題でない、運を天に任してやるのだ。君はアメリカへ行つて働け、俺は內地に居つて働く」これからが圓覺寺の本堂

に於て、時宗公のお墓の前でお話したいことである。「我輩が今日決心したのは、成功不成功の見込があつて、軍をしやうといふことに獻策したのではない。僕は昔元寇の時の事を讀んだことがある。元寇が大軍を率ゐて、壹岐、對馬を占領し、筑前も占領し、人家を燒き、人民を虐殺した。龜山上皇は身を以て國難に當るといふ願をお立てになつた、日蓮上人は信徒を集めて國難に當ると言ひ、當時の執權職の北條時宗は、この國難に自ら當り、若し九州、山陰、山陽のあの地方の豪族や兵隊が皆負けたら、我は鎌倉から九州に飛んで行つて、さうして身を卒伍に落して、兵隊と共に自ら戰線に立つて戰ふ。而して我が妻は我が行く時に九州に連れて行つて、粥を炊いて兵士を勞らふ、兵糧を拵へて、夫婦共稼ぎでやるといふことを言はれた、と書いてあつた本を讀んだことがある。

我輩は今日ロシアとの戰爭で成功の見込はない、ロシアを負かすといふ案はない。唯北條時宗の先例に習つて、若し滿洲に居る兵隊が皆討死して、日本海の軍艦が皆沈んでしまつたといふ時には、伊藤博文は家内を伴つて九州に行つて、身を卒伍に落して、我輩は劍附き鐵砲を担いで軍をして、家内は北條時宗の家内のやうに、粥



を炊いて將士を勞らはせて、夫婦共稼で九州に行く積りである。北條時宗が元寇の時に決心したやうに、我輩も夫婦共にこの國難に當つて、僕は北條時宗の第二番目になり、家内は第二の北條時宗の家内にする決心である。君はアメリカへ行つても成功の見込はないと言ふが、今日は國難である。伊藤博文の死ぬ時はこゝである。我が位階勳章、生命財産は皆陛下の賜である。君の位階勳章、生命財産も陛下の賜である。博文も金子も共に陛下の恩惠を受けて居る。この際、一は東京に居つて陛下の御諮問にお答へする。一はアメリカへ行つて大統領を說く、東西に相別れて君と僕が働く。こゝが卽ち陛下の恩に報いる時である。我輩は北條時宗の例に習つて、滿洲の兵が討死したら、博文は家内を連れて九州に行つて、身を卒伍に落して戰つて、博文が生きて居る間は、ロシアの軍人は一人と雖も日本の土地は踏ませない。さうして我輩はそこで討死する積りだ。君がアメリカへ行つて如何程やつてもいかなければ、その時は天が日本を見捨てた時だ。君もやれるだけのことをやり盡せ、俺は第二の北條時宗になる」。

斯う言つて私の前に自分の決心を示された。私も「よく分りました。貴方の決心

が北條時宗の先例によつてやると言はれるなら、私もアメリカへ行つてやれるだけやりませう。どうぞ貴方は東京に居つてやつて下さい。私はアメリカへ行きませう」。この時の私の決心は、北條時宗公の先例に習つて伊藤公が決心された、その熱誠なる勸告を私は聞いて、私も伊藤公と同様に、北條時宗の例に習つて、あのアメリカに行きませうと二人で約束したことが始まりであります。

軍が始まつて見ると海陸共に連勝々々で、鴨綠江のロシア軍を防せいだのみならず、サイベリアに居つたロシアの兵隊を討ち、滿洲奉天まで取つて、旅順、ウラヂオ艦隊は閉鎖してしまひ、旅順はとう〳〵三十八年の一月に開城して我がものになつた。三十八年の五月には、ロジエストウェンスキーが本國から大艦隊を率ゐてやつて來たが、これは日本海で東郷のため沈められた。その場所は元寇を沈めた場所と同じ筑前の玄海灘である。斯の如き緣故が私共の筑前にはある。元寇の襲來したと同じ場所でロシアの艦隊は運命を決したのであります。

この決したのは、陸海軍の勇は勿論、明治天皇の御稜威の而からしむる所で、又擧國一致といふことが、日露戰爭に大勝利を得たと思ひますが、その本を決したの



は、伊藤公である。伊藤公の決心されたのは北條時宗が元寇の時に決した先例によつて、第二の北條時宗になる決心をされたのである。この決心を聞いて、私も然らばアメリカに行つて微力を盡さうと言つて相別れたのが、三十七年の二月であつた。ところがあの通りに連勝々々でポーツマス條約によつて滿洲も取り、樺太も半分取つて、後から言へば非常な好結果であるが、二月四日の伊藤公と私との會談の時は、伊藤公にもどうなるか分らない、成功不成功の見込はない。唯、運を天に任せてやるつもりであつた。あの二月四日の伊藤公が話された決心は、全く北條時宗の元寇に對する決心と同じことである。その餘波を私も受けてアメリカに行くことになつたのであります。

私はこのことを、時宗公の靈に對して、この圓覺寺の方丈に於てお話しやうと思つて今日參りました。甚だ詰らないお話を、長い間御清聽を煩はしまして有難うございました。

（午後三時終了）

# 法光寺殿の一喝

圓覺寺派管長　太田常正

當山開基法光寺殿杲公大禪定門、卽ち北條時宗公の年諱法要に際しまして、私は公の一喝についてのお話を少しく致します。

「一喝して世に示す」と軍歌にも歌つてあります通り、これは著名なる一喝でありまして、普く人の知つて居るところであります。併しながら彼の一喝が公の何處から出たか、如何なる根底があつて、威を振つて一喝したかといふことは、これは知つて居る人は極めて少數であろうと思ひます。唯單に公が當時の決心勇氣を示す爲に喝したといふ位の見方でありましたならば、それは誠に淺薄な見方でありまして、固より言ふに足りませぬ。私は此處で直截簡明に申してしまひます。

公の一喝は外ではありませぬ。公が多年參禪學道に於て鍛へたる鐵腸、多年の修

業で得たる禪定力より出でたる一喝であるといふことを斷言して置きます。

當時の鎌倉の武將達は大抵皆禪に參じて居つて、各〻分に從つて力を得て居ります。我が法光寺殿の如きはわけてもその點は確實なものであります。

公は幼少の頃よりして、父君最明寺時賴公指導の下に專ら武道を錬磨せられて、文も勿論修めたのであるけれども、それと共に時の善知識の薫陶を受けて、心膽を鍛錬するといふことを努めて居つた。青年時代から、薨去に至るまで、參禪學道の修業を繼續して居つたのであります。一番長く鉗鎚提撕を受けたのは、建長寺開山大覺禪師であります。それから淨智寺開山佛源禪師よりも、深く法益を蒙つて居ります。後に新たに、特に屈請した我が開山國師と時宗公とは、實に克く機々相投じて居ります。實に克く道相契つて居ります。時宗公は其の全部を國師に傾倒して、無二の師と仰いで、この道を精練したのであります。中々一朝一夕の問法者、參禪者とは同一に語ることが出來ないのであります。

公の如き英傑にして、而して眞劍に參禪したのでありますから、その得力、その造詣の大にして深いことは、これは推して知ることが難からぬのであります。



禪宗には棒喝といふことがあります。德山和尚は「門に入れば卽ち棒す」といふ示し方。我が宗祖臨濟和尚は「門に入れば卽ち喝す」といふ示し方であります。棒喝は我が禪門では從上の祖師方が其の行ふべき場合には臨濟德山に限らず皆それぞれ行つては居りますが、喝は臨濟、棒は德山と本家本元の樣になつて居るのであります。わけても我が臨濟の一喝は是は又格別なものでありまして、山僧敢て自家の味噌を賞讃するのに躊躇致しませぬ。

この一喝でありますが、臨濟和尚はこれを四通りに分けて居る。それはかうであります。或時の一喝は金剛王寶劍の如く、或時の一喝は踞地金毛の獅子の如く、或時の一喝は探竿影草の如く、或時の一喝は一喝の用をなさず、一喝をかう四通りに分けて居る。

一喝は唯聲を大にして叫ぶといふ事ではありませぬ。此の一喝の中に無量の妙義總ての宗旨が含まれて居るのであります。この臨濟の四喝といふものを明かに調べて確と手に入れない內は、中々喝を下すの分際はないのであります。法光寺殿の如きは、さういふ屋裏のことを確かに手に入れて居つたに相違ありませぬ。公の振威

一喝には誠に深き固き根底があるのであります。若し我が禪宗の宗旨の眼から見まするといふと、國師の前で喝した公の一喝は、玄海十萬の胡軍を立所に鏖殺して居るばかりでなく、大元四百餘州を寸土を留めず粉碎してゐるのであります。宗旨の眼から見まするといふと、確實にさうなのであります。

而してこの一喝は公の過去に遡り、又未來に亘つてその威力を無限に延長して居ります。

時宗公は何方も御存じの如く、元の使者を二度も斬つて居ります。

敷島の大和心を人とはゞ
蒙古の使　斬りし時宗

誰やらもかく詠じて居るが、中々あの當時の元國に對して、如何に英斷明決とは言ひながら、よくも押し切つてあゝいふ措置をとられたものである。是は確に一喝の威力が過去への延長であります。

然らば未來への延長は如何とならば、法光寺殿の護國の大精神といふものは、未だかつて死滅したことがない。六百五十年の今日まで生々として居ります。我が帝



國の國民同胞の頭に、胸に、腹に、而して全身に潑剌として生きて宿つて居ります。さうして一朝事ある時には非常なる力をもつて働いて居ります。これは未來へ延長したる一喝の威力であります。未來へも過去へも其威力を斯の如くに延長して居る一喝であります。之を更に一歩を進めて、根本的に總概的に見まするといふと、公の一喝は過去、現在、未來の無限の時間を一貫して、宇宙に磅礴して居るのであります。我が法光寺殿杲公大禪定門は大事到來の秋に當つて、正に斯くの如きの一喝を下されたのであります。

この喝についての國師の問答往來、是は知れる人は既によく知つて居りますが、まだ知らないお方もありませうから、玆に敢て擧揚すること一回致します。

弘安四年七月蒙古十萬の大軍が玄海灘上に襲來した時、時宗公は甲冑を著けて國師に入室參禪をしたのであります。「弟子卽今大事到來す」、國家の大事は、國家の柱石たる時宗公の大事であります。「弟子卽今大事到來す」。さうすると國師は「如何か向前せん」、大事に對してどう向ひ進むかといふことである。そこで時宗公が威を振つて一喝す「喝！」……(その聲滿堂を搖る)……であるのであります。「眞

の獅子兒好く獅子吼す」かう國師は賞讃せられました。法光寺殿は（尊像を顧視して）こゝで微笑して居られます。尊聽を穢しました。



# 元寇と北條時宗公

（昭和九年四月三日於圓覺寺方丈）（第一回）

樞密顧問官子爵　石井菊次郎

本年は北條時宗公が薨去されて滿六百五十年に當り、實に感慨無量の年である。この歴史的意義深き記念の日に當つて、歴史家ならざる私が、この席に出づるは既に失當の觀あるを免れない然しながら私の見る所に依れば、北條時宗公の短き一生が、歴史的意義深き所以は、其の元寇と終始したからであり、而して時宗公と元寇との關係は歴史上明瞭なる事實に立脚し、その事實は中學生徒の暗誦するほど、能く知れ亘れる所であり、且つ其の事實について批判を下すことも亦專門的智識を必要とせず、普通常識を以て之を爲し得る所であらねばならぬ。そこで今日私が玆に立つて言はんとする所は、中學生程度の歴史の智識を以て、私の常識判斷に出でたるものに外ならないことを、前以てお斷りする。

時宗公に就いて先づ想ひ起すは、公が北條氏なることである。北條氏と云へば直ちに承久の不祥事を聯想せざるを得ない。さて世には善人にして政局に當りては方針を誤り、惡政を布きしものもあれば、一方陰險邪智の人が案外善政を施す場合もあつた。北條氏にして執權たりしものが、悉く陰險邪智であつたかは別問題として、その政治の成績を見れば、その多分は立派にして方さに大政治家の敏腕に出でたるものとしか視られない。但しその卓越せる政治的美績が、承久の不祥事件の爲に陰蔽せられて、後世の正しき認識に漏るゝものあるは、誠に是非もなき次第である。

私が今日茲に述べんとするは、北條氏に就てゞはなく、時宗公に就てゞある。時宗公は元寇の爲に、早くも十八歳にして執權となり。元寇撃退てふ破天荒の大功績を擧ぐる爲に、餘り身心の衰弱を來してか三十四歳の壯年を以て早世したのである。公の一生は十六年の執權職を出でずして、公の執權職は元寇役の一事に專念せられたのであつた。即ち私はこゝに時宗公を論ずるに當り、元寇役以外の何物にも論及しないつもりであるが、實は元寇以外に公を語るべき何物も存在しないと謂ふ方が適當であるであらう。元寇の初期に於て、鎌倉の執權は北條政村であつて、時宗公



はその連署、即ち副執權とて輔佐役であつたが、危機漸く逼るに隨ひ、機關の複雜は國家を誤るの虞れありとして、公は親ら執權職となり大事の衝に當られたのであつた。天は空前にして又絶後なる大國難に際して、大和民族の偉大なる精神の結晶なる相模太郎、即ち北條時宗公を降して、元寇の大事に當らしめたものと謂ふべきであらう。

我國に於て源平が對立して、覇を天下に爭ふて居たる間に、蒙古の一隅に不思議なる傑物が現はれた。彼は蒙古を統一したる後、西進して亞細亞中原を長驅し、波斯、アラビア、土耳古、更に黑海を渡つてバルカン半島より今の露西亞まで侵入し、茲に韃靼王朝を打ち建てたのであつた。一面蒙古は南進して支那を侵した、有名なる成吉斯干とはこの傑物の事である。その當時支那は宋朝であつたが、曩に朔北の蠻族と輕視せる金に苦しめられ、將さにその併呑を受けんとしたる際、成吉斯干は更に北より南下して先づ金を討ち次で支那に迫つた。成吉斯干の孫に至つては完全に金を亡ぼして、終に宋朝までも併呑した。即ち忽必烈は支那併呑の後、國を元と名づけ更に朝鮮を服して藩屏とした。茲に至つて蒙古大王の領土は、西は歐洲地中

海より東は支那朝鮮に及び、極東に於て未だ王化に屬せざるものとしては、一小島國たる我が日本のみとなつた。日本は干戈を用ふるまでもなく、筆舌を以て諭せば馳せ參ずるであらうと、高飛車に出て來たのがそも〳〵元寇の發端である。

日蓮上人は曾て國難は西方より來ると豫言せられたさうであるが、其豫言が適中したるものか、兎も角國難は果して西北方より來たのである。而もその國難たるや方さに空前絶後的の恐るべきものであつた。亞細亞を横貫して歐洲の中心まで侵略したる蒙古の精鋭と、四百餘州の支那軍と、之に加ふるに當時極東に於ける比較的大海軍力を有せる朝鮮との聯合軍の襲來がそれであつた。靺鞨の強勇部落刀伊が、高麗兵を案内先鋒として、對島壹岐を犯し筑前博多に迫り來つたのである。然しそれは一時的略奪行動に過ぎなくて我九州軍は容易に之を擊退し得たのであつたが、今回の元寇はそんな茶番事ではなく、我大八洲を一呑にしやうといふ野心に燃ゆる併呑戰爭の到來に外ならなかつた。古往今來我僻隅を狙ふた外敵はあつても、我國全體を併呑せんとせる敵の襲來は曾て無かつた。その之あるは、元主忽必烈に於て始めて見出したのであつた。

此國難に直面したる時宗公の態度は大和民族の誇りであらねばならぬ。始め、龜山天皇の御諮問を蒙りたる側近の藤原氏は、文弱の餘弊に墮し、國威國光を慮ること浅くして、動すれば偷安苟息の策に出でんとした。之に反して關東武士道の權化とも謂ふべき相模太郎の時宗公は、元主の牒狀を以て我國威を損する非禮として、之に回答を與へずして握り潰すべく決心したのであつた。幾度排斥せられても性懲もなく催促し來る蒙古の提議に對し、時宗公の堅き決心は不動山の如しであつた。元主は筆舌の終に日本を屈するに足らざるを感得して、茲にいよ〳〵實力を以て壓服に取り懸つたのが、即ち文永十一年の來寇であつた。その戰役では勝敗未だ決せざる内に、會々起れる神風は敵艦を沈沒せしめて、元軍の全敗に終らしめた。我方に於ては敵の戰術の我に異れる所あるを體驗した。我方の一騎一騎名乘の戰法に代ふるに敵は蜜集團體の運動を以て展開し、剩へ我軍の知らざりし火器鐵砲の準備あるに一驚を喫した。

敵將は支那に逃げ歸つてから、陸戰に於ては大に日本軍を擊挫したとでも報告したるものか、元主は戰役の翌年を以て復も使者を我に遣した、敵の火器銃砲を物の

數ともせざる時宗公は、元の使者を鎌倉に送らしめて之を龍ノ口に斬つた。相模太郎の意氣、眞に天を衝くの慨を示したのであつた。それより三年を經て又も送り來れる元使を今度は博多に斬つた。斯うなつては元主忽必烈の體面問題となり、いよいよ彼は大々的に蒙古支那朝鮮の聯合軍を組織して日本を一擊に屠らんと決心した。彼は先づ日本征伐省を設けて、專らその事に當らしめ、斯くて起りたる弘安四年の元寇が如何に我國の光輝ある勝利に終りを告げたるかは、我一般國民の終世忘る能はざる所である。

元主忽必烈が日本併呑を決心し、初て使者を我に送つたのは文永五年であつた。それより十四年間、彼は驚天動地の實行に熱中したのであつたが、文永、弘安の兩役とも全敗を滿喫して流石世界の大覇王を以て自任し居たる彼も、遂に其十四年計劃を斷念して泣寢入りするの已むなきに至つた。復讐戰の如きは彼の思ひも寄らぬ所、否復讐は却つて我方より先方へ仕向けられた時宗公は文永の役後に於て、我より機先を制し、先づ高麗を討たんとし已にその命令を發したと云ふことであるが如何なる事情に因りてか、それは沙汰止となつた。然し弘安の役に於て宋元の手並を



知り得たる九州男子は、其後間斷なく支那南北の沿岸數百里に陰見出沒して侵入掠奪を縱にし、謂ゆる倭寇の惱みを彼に浴びせた。支那は之が防禦に窮して幾度かその取締方を我國に愁訴したのである。

世界古今の歷史を通覽するに、元寇ほど大規模なる外國征伐の計劃は見當らない。獨り波斯の大王ダリュスが希臘を併呑せんとして遠征の軍を起したのが稍近き樣に思はるゝが、それは元寇より千六七百年以前の事で、信ずべき文獻に乏しくして、その眞相を得難いから何とも云ふことは出來ない。當時波斯王が如何に強かつたとしても、亞細亞、歐羅巴を股にかけた成吉斯干忽必烈とは桁が違つて比較し得べくもないやうに思はれる。波斯の怪しき一例を除いては、元寇は眞に古今獨步の大擧であつた。我國は其後日清、日露の兩大戰に遭遇したのだが、それ等は清國及び露國が日本の向上前途を遮礙したるが爲に起りたる戰爭であつて、その爭點は滿韓にほかならなかつた。清、露が我國全體を併呑せんとして振向けられたのではなかつた。單り元寇に至つては其の他に類似なき大仕掛の來襲が、我國を一呑にせんとの野心に出でたるものである。何と云つても元寇は我國に取り空前絕後の國難そのも

のであつた。

孤島孤立の日本が、蒙宋韓の聯合軍を散々に撃滅し、敵をして復た起つこと能はざるに至らしめたる元寇の歴史に就ては、我國民たるもの充分に之を研究してその眞意義を捕捉し置かねばならぬ。此大事件に關する私の常識批判の二三を開陳すれば、

第一の問題は元側に於て日本征伐を朝飯前の些事として、充分の準備なかりしかの點であるが、私の觀察に依ればその反對であつた。十數年を掛けて態々日本征伐省までを設け、將と云ひ卒と云ひ兵器と云ひ艦船と云ひ、凡そ當時の蒙宋韓の有する精鋭をこの一事に傾注したことは已に述べ來つた通りであつた。其の籌謀計劃工作準備に於て、人事の限を盡したるものと謂はねばならぬ。

第二の問題として時宗公は、日本に振りかゝりたる國難の重大性を知り貫いて居られたか、正しく之を知らずして慢に放膽なる態度に出たるを、幸にも暴風雨の天祐に依つて奇勝を博したるには非ざるかの點である。この問題に對して私は時宗公が決して暴虎馮河の勇に逸つたるものに非ず、充分に時局の重大性を知悉したる上



にて、彼の大決心を採りたることを疑はない。時宗公が一方彼の英斷に出でたると同時に、他方全國に號令して國防を充實せしめたる熱心さに於て、如何に彼が將に直面せんとする外敵の恐るべきかを知悉せるやを察するに足る。獨り時宗公のみに非ず、日蓮上人が前述の通り國難西方より來る。と豫言せし所を見れば、彼も亦支那の政變と忽必烈の襲來を感得したるものを見るべきであらう。時宗公、日蓮上人等が如何にして蒙古襲來を豫見し得たりと判定するかと云ふに、當時支那より我國に來れる宋の亡命客少からず、殊に僧侶として多數の名僧知識を算したのであつた。現に時宗公が禪に於て師事したる祖元禪師、則ち當山の開山佛光國師は宋の名僧であつた。時宗公より六七十年も前に在つて、實朝は親しく宋に入つて自ら修むる所あらんとした程である。これ等亡命の客は、母國に在つて如何に母國の宋が金の國のために侵蝕されたるかを目擊し、蒙古がその恐るべき金を亡してから、更に破竹の勢ひを以て宋に肉迫せしかを見せつけられたる體驗者達であるから、彼等が今日本に歸化して、蒙禍の恐るべきを日本官民に警告して以て、彼等自身の安全保障を得んとするは何より自然の事であらねばならぬ。支那より本朝に亡命したるこれ等

名僧知識及び宋の遺臣は、日本に渡來して宋朝文明の傳道師たりしと同時に、蒙古襲來の前振れの執達吏でもあつたのである。恐れ多くも、龜山天皇は、元の牒狀に接して、疾くも國難の重大性を御洞見成らせられ痛く宸襟を惱まさせ給ひ、石清水八幡宮及び伊勢大宮に御祈願遊ばされた。鎌倉に於ては執權自身は勿論、全國民に令して警戒と祈禱とを怠らざらしめた斯くて全國津々浦々に至るまで、一般國民は國難非常の事態を解得して、凡そ神社佛閣は晝夜とも祈願の燈明絶ふることなく、爲に燭束香華燈油は全國品切れになつたと云はれた程である。この一事は獨り時宗公のみならず、國民が國難の重大性を痛感して居つたと云ふことを如實に證明するものではあるまいか。

第三の問題、我軍の武雄が襲來の元寇をして一敗地に塗れしめ、敵忽必烈をして再び起つ能はざるに至らしめたることは前述の通りとして、若しあの時二百十日の颱風が起らなかつたとしたら、戰局は如何に發展したであらうか。私は軍事を解せず戰爭の勝敗を測定し得る者ではないが、當年の歷史は吾人に此問題を決すべき有力なる材料を提供してゐる。前述の如く敵は團體運動の兵法と、火器鐵砲とを有して居つて此二點に於て我軍は敵に劣るの觀あるを免れなかつたが、他方に於て我將卒の剛膽と勇力とは敵の心膽を寒からしめた。敵艦を夜襲して我船の檣を横へて敵艦内に突擊肉迫せる勇ましさは、今尚目前に散らつくやうではないか。次に我軍隊の背後に於ける國民の意氣はと云へば、井芹二郎の一例を以て他は推見するに足ると思ふ。—私は出陣したきは山々なれども、何分八十四歳の老齡にて進退自由ならず、長男は六十五歳なれば尚弓矢の事に從ひ得る、其伜は三十七歳の若者なれば勿論として外に親戚に十九歳の男子あり。此三人は是非共出征に加はらして頂きたし。——との從軍願ひを出して居る我軍は文永戰役の經驗によつて、博多筥崎方面一體の海岸に防壘を築き以て弘安の役に至つては敵をして上陸不可能に陷らしめたる所は、戰局の進むにつれて宜しきを制する我方の優勝點を示してゐる。加之文永弘安兩役を通じて侵入軍に對する我防衛隊は、殆ど九州男子だけにて受持つて居つた。時宗公が急遽派遣したる關西中國の援兵すら未だ九州に渡らざりし間に、敵は早くも潰滅したのであつた。由來關東武士は日本全體に匹敵すと當時云はれて居つたさうであるが、其關東武士の如きは未だ一兵も動かされなかつた。依之觀之に縱令あ

の當時二百十日の颱風が吹かなかつたとしても、元寇は遂に敗北すべきは軍事上眼なき私にも明瞭である。

以上の問題は元寇史を渉獵する吾人の胸中に自ら浮び來る所であるが猶茲に吾人の意を強ふする、而も吾人の忘る可らざる貴重の史實がある。皇室の御事は申すも愚か、我國民全體に獨立自尊心の強盛なりしことが卽ちそれである。我國王朝の昔に在つては、隋唐の文物我に優れるものあるを見ては採つて模範となすに躊躇せざりしも、苟も國家の威嚴に關しては一歩も讓る所なく、專ら對等を以て彼を遇し自らを持して渝る所はなかつた。卽ち小野妹子が帶同せる國書には、――日出る所の天子書を日沒する所の天子に致す――と冒頭してあつた。爾後隋唐に對する修交數百年に亘り、未だ曾て此一貫精神を曲ぐる所はなかつた。否此精神は年と共に向上發展を遂げた、我國に於ては元寇に先立つて武士道起り大和魂が練磨せられて居つたから元寇の頃には既に我國民は、自國の獨立と尊嚴の觀念に燃へて居つたのである。

末の世の末の末まで我國はよろずの國に勝れたる國



てふ歌は其頃の歌であつたと云ふ。又日蓮上人は百尺竿頭更に一歩を進めて居つた。上人は清澄山に登り太陽が太平洋より出でゝ西山に沒するを見て、茲に我日の本の天職を解し、支那より傳來したる教義を改革して、彼の新教を西方各土に逆輸出せんと決心したることは、上人の公言せる所であつた。我日本の空前絶後なる國難に際し、實力界に於て時宗公の如き大膽不敵の英雄、精神界に於て日蓮上人の如き豪僧が儼乎として並び存した事が、我に取つて非常なる強味であつたのである。卽ち我國は武道に於て、將た思想に於て支那天竺に優るも劣らじとは當時我國民の確信であつた。此確信の結晶が相模太郎の決心となつて元寇の難を見事に打碎いたのであつた。

元寇襲來に當つて、龜山天皇は文弱の積弊に勝へざる京都の廷臣の賴む能はざるを看破せられたのであらせられた。この京都に於ける文弱の反動として關東には武士道が起つて居た、鎌倉の北條は國民間に散在せる大和魂を拾集して、之に副ふるに新興の武士道を以てし、之が爲め士氣頓に振ひ方に馬肥へ兵躍るの慨があつたから、元寇に對する回天の大業は之に御任せあらせられた。天皇御躬らは神佛御祈願

を以て國民の元氣皷舞に日夜を分たれなかつた。斯くて元寇退治は龜山天皇の御稜威と、相模太郎の意氣とに依つて遂げられたのである。元寇御退治の天皇の御詠に

四方の海浪をさまりて長閑なる我日の本に春は來にけり

とあるを拜する。蓋し上皇元寇の爲に御宸襟を惱まされたること深かりしだけ、それだけ元寇平定に對する御滿悅の深かりし御有樣が、此御一詠にあり〳〵と窺ひ奉られるのである。

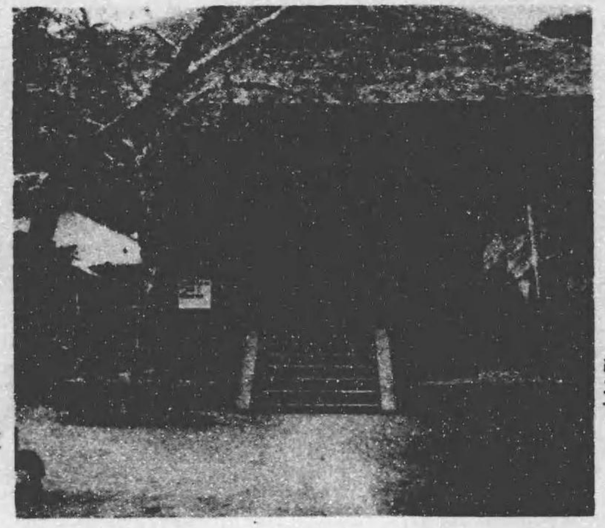
試みに思へ、建國以來今日に至る二千六百年の我歷史を通じて、我忠勇なる臣民中、時宗公が龜山上皇に捧げた程に君帝の宸襟を御慰め申し上げ、叡慮を安んじ奉つた者が他にあるであらうか。私は長き外國勤務中機會ある毎に外人に向て我元寇の歷史を講演するに於て無上の誇を感じたのであつた。私の案ずる所に依れば、我歷史中特筆大書すべき元寇の一篇が、汎く且つ充分に我國民の認識を受け居らざるの觀あるを免れない。之れ私が五年前「外交餘錄」を公にするに當り「北條時宗公は世界の一大偉人であつた。此偉人が同胞日本人より十分なる認識を受けて居らぬ觀あるは遺憾とすべきである」と叫んだ所以である。

以上は元寇と時宗公てふ題下に所感の大要を述べたのであるが、私は元寇に關する拙著中の一節を左に移して本講演を終らんとす。

忽必烈の陣中に豫て彼に愛顧せられて居つた伊太利の冒險旅行家マルコポロが居つた。彼が歸國後に編述したる紀行談中に、我國に關して極東邊海に日本と云ふ國があり小島國なれども其宮殿社堂は悉く金を以て鏤められ、其富計り知るべからざるものがあるとの一節である。此は恐らく忽必烈が日本征伐を決したる際、遠征を喜ばざる將卒をして日本に至らば掠奪の望ありとの慾念を起さしめ、因つて以て元氣よく出發せしむるための宣傳であつて、それをマルコポロが横聽したものであつたらうが此宣傳は不思議な方面に不思議な効果を結んだ。と云ふのはマルコポロの右の記事は伊太利人の好奇心を唆り、それに幾何もなくして地中海諸國の航海業者の間に奇を好み新を競ふの氣運起り、印度航路の探險を企つる者も出て來りたる折柄、印度の先に支那といふ大國があり、又其先には無限の富を有する日本てふ國ありとの紀行談はたま〳〵勃興したる航海熱に一段の奬勵劑となつたと見へる。彼のコロンブスは海の西方に何處までも邁進するに於ては、先

づ以て此日本に達せなくてはならない譯である。一度日本に着いてから支那に、支那から印度に渡るが順路になる筈だと見て取り、日本を目標として彼の遠征を企てたと云ふことである。果して然りとせば、弘安の元寇が動機となり米國が生れ來た譯である。即ち米國が日本を世界に紹介して呉れたより前に日本が亞米利加を世界に紹介したのだとも謂へる。ペエリイ提督は北條時宗公に御禮を返したことにもなる。歴史の因縁も亦奇なる哉である。

330
640



贈從一位北條時宗公廟所（北鎌倉驛ヨリ約二丁）

正光寺殿杲公大禪定門
無畏殿（檀那塔）

昭和十一年十二月一日印刷
昭和十一年十二月四日發行

定價 金貳拾錢

編輯兼發行人 神奈川縣鎌倉郡大船町山之内圓覺寺佛日庵内 北條時宗公鑽仰會 代表者 高畠眉山

印刷人 東京市芝區芝浦一丁目二三 和田助一

印刷所 東京市芝區芝浦一丁目二三 單式印刷株式會社

發行所 神奈川縣鎌倉郡大船町山之内圓覺寺佛日庵内 北條時宗鑽仰會

終